

## 顎変形症の治療—形成外科の立場から—

私は **1975** 年、東海大学医学部形成外科学教室に赴任当初より顎変形症に興味を持ち、それまでの顔面骨変形治療骨折の手技を用いて上・下顎骨切り術、更には頭蓋顎顔面の先天異常の手術を行って参りました。今回はこれらの経験の一端をご紹介致します。

### 1) 顎変形症

最近では成人症例が増傾向にあるようですが、社会人に対する外科矯正は時間的制約のため、少しでも **down time** の少ない方法を採用する必要があります。今回は成人症例における術前矯正の最低条件、骨の固定法、顎間固定期間、**occlusal splint** 使用の是非などにつき、**relapse** 症例などの合併症例の反省を含めて考察します。

### 2) 頭蓋顎顔面の先天異常

**Crouzon** 病、**Apert** 症候群といった **major craniofacial deformity** は、以前は **paper surgery** や **computer simulation** などにより **VTO** を予想していましたが、最近では **3D-CT** のデジタルデータから実体模型を作成することにより、**simulation surgery** が容易になりました。また骨固定に用いる **mimi-plate** の発達、人工骨の開発などにより、この分野は格段の発展を遂げました。

### 3) 顎顔面骨の美容外科

顎変形症の手術目的のひとつが審美性の獲得にあることは言うまでもありませんが、最近では美容外科の領域が顔面骨にも拡大し、特に下顎角の **reduction** 症例は増加傾向にあります。

### 4) 骨延長の試み

第 **1** 第 **2** 鰓弓症候群は、顔面骨の発育完了を待って **Two Jaw Surgery** を行うのが通常ですが、**95** 年前後より修学前の **osteodistruction** が普及しました。この手法は **craniofacial deformity** にも拡大されつつありますが、少なくとも第 **1** 第 **2** 鰓弓症候群における成績は芳しくなく、最近では批判的な意見も多くみられます。

### 5) 顎裂骨移植

**95** 年に日本形成外科学会で行われた **Romalinda** 大学 **Boyne** 教授の講演以来、われわれも **8-10** 歳に顎裂部に骨移植を行い犬歯を誘導することにより、咬合機能も審美的にも良好な成績を得ています。

### 6) 唇顎口蓋裂児に対する最新の治療—術前顎・口蓋矯正装置と早期顎口蓋形成術—

われわれは **98** 年から、**Latham Appliance** を用いた唇顎口蓋裂児に対する術前顎矯正を行ってきました。これにより顎の移動を短期間で確実に行うことができ、良好な結果を得ております。またこの方法により、顎裂部の閉鎖を口唇形成術と同時に行うことが可能となりました (**Gingioperiostplasty**)。さらに **01** 年からは独自に開発した新型の口蓋矯正装置を組み合わせ、口蓋の裂幅狭小化と口蓋骨の後方延長を行っております。裂幅の狭小化により口蓋形成術の手術侵襲の減少を図り、さらに **screw** を回転することにより口蓋骨の後方への骨延長を行い、鼻咽腔閉鎖機能の向上を図っております。現在われわれは、片側性完全唇顎口蓋裂の患者に対しての装置を用い、生後 **6** ヶ月で早期口蓋手術と口唇形成術を同時に行っております。

.....

◎谷野 隆三郎 (たにの りゅうざぶろう) 先生  
東海大学医学部外科学系形成外科学 教授